

指導者たちに捕らえられたペテロとヨハネは、「主の名によってだれにも語ってはいけない」と厳しく命じられ、また、おどされた上で釈放されました。そして、彼らは仲間のところに行き、指導者たちが語ったことを残らず報告するのです。すると、みなは心と思いを一つにし、声を上げて主に向かって祈りました。祈り終えた後、彼らは聖霊に満たされ、みことばを大胆に語り出します。そして、みな持ち物を共有するようになるのです。その群れの中に、後にパウロの助け手となるバルナバもいました。それが先週までの流れです。

今日はその続きの箇所を開いていますが、「ところが」ということばで始まります。つまり、聖霊に満たされ、聖霊に導かれて歩んでいた教会の中に、ある問題が起こるのです。アナニヤとサツピラという夫婦による偽りと彼らが死ぬという事件です。5節と11節を見ていただくと、「これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた」とあります。この場合の「恐れ」とは、以前見たような「畏敬の念」ではありません。それは恐ろしい意味での「恐れ」です。英語では“(Great) Fear”とあります。

ある事件を通して、教会の中に非常な恐れが生じたというわけですが、いったい何が起こったのでしょうか？1節「ところが、アナニヤという人は、妻のサツピラとともにその持ち物を売り」。ここには、あなたが恐れを感じるようなことが記されていますか？アナニヤと妻のサツピラは、他の弟子たちのように持ち物、つまり、彼らの地所を売りました。何のためですか？その代金を使徒たちのもとにもって来て、主を信じる者の群れとしての教会にささげるためです。ですから、この時点では、良いことが起こっています。

ところが、2節「妻も承知のうえで、その代金の一部を残しておき、ある部分を持って来て、使徒たちの足もとに置いた」。この部分はどうですか？何か恐れを感じるような出来事は起こっていますか？「その代金の一部を残しておき、ある部分を持って来て、使徒たちの足もとに置いた」というところは、特に問題ないと思います。というのも、私たちも主にささげるのは、収入や持ち物の全部ではなく、一部分だからです。ただ、「妻も承知のうえで」というのが、そこに何か隠されていたことを匂わせています。

アナニヤは、妻のサツピラに何を語り、彼女はいったい何を承知したのでしょうか？3-4節「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」。

当時は、今のように家や土地がいくらで売れたかをネットで簡単に調べられるような時代ではありませんから、ペテロが、どうやってアナニヤがささげた金額と彼が地所を売った値段とが違うことに気付いたのかはわかりません。もしかしたら、それを告げる人がいたのかも知れませんが、あるいは、自分で調べたのかもしれない。いづれにしても、ペテロは、アナニヤがその一部を残しておきながら、それを全部だと偽ったことに気づくのです。そして、そのような偽りが教会の中に持ち込まれることを彼は見逃しませんでした。

ペテロのことばをもう一度見ます。「それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか」。ここでペテロが問うているのは、地所をいくらで売ったとか、ささげたお金の額についてではありません。むしろ、アナニヤが、その一部を残しておきながら、それを全部だと偽ったところに、しかも、妻のサツピラと共謀して教会をだまそうとしたところに、ペテロは彼らの罪の問題性を見たのです。

アナニヤとサツピラが、いつ、どのようにして主の救いにあずかったかは、聖書に記されていないのでわかりません。でも、彼らが自分から地所を売ったところからして、すでに救われていたことが推測できます。彼らのささげた金額がいくらであったかはわかりません。でも彼らは、自分たちの地所を売ってまでして、それをささげようとしたわけですから、そういう意味において、彼らは信仰をもって自発的にこのことをしようとしたといえるでしょう。彼らは聖霊に満たされる経験もしていたと思うのです。

ところが、いざそのお金をささげる時になって、アナニヤは、全部をささげるのを惜しみ、妻のサツピラと心を合わせ、偽ることをたくらむのです。彼に対してペテロはこのような表現を使っています。「サタンに心を

奪われ」「聖霊を欺いて」「神を欺いた」と。ペテロは言います。「どうしてあなたはサタンに心奪われたのか。それは救いの保証としてあなたのうちに与えられた聖霊を欺くこと、実に神様ご自身を欺くことだ」と。

主は言われました。ヨハ8:44「…悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです」。皆さん、このアナニヤとサツピラの言動をあなたはどう思いますか？「ちょっとくらいは仕方ない。彼らも人間なんだから」と彼らを弁護しますか？それとも、ペテロが言うように「彼らはサタンに心を奪われた」とそれを悪として認めるでしょうか？

彼らのしたことに対して、主がどう判断されたかは、5節に記されています。「アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた」。主は、彼のいのちを取られました。つまり、主は、アナニヤが故意に聖霊を欺いたことに対して彼にさばきを下されたのです。アナニヤは、その場で倒れて息絶えました。そのようなことが、ごく身近なところで起こったわけですから、当然、それを聞いた人々は、非常に恐れたことでしょう。私もそこにいたら、きっと恐れていたに違いありません。

三時間後、妻のサツピラが、夫が死んだことを知らずにペテロのもとに来るのです。ペテロは彼女にこう尋ねます。8節「あなたがたは地所をこの値段で売ったのですか。私に言いなさい」と。彼女は答えます。「はい。その値段です」と。サツピラのこの返事から、このことが計画的犯行であったことが実証されました。そんな彼女にペテロは言います。9節「どうしてあなたがたは心を合わせて、主の御霊を試みたのですか。見なさい、あなたの夫を葬った者たちが、戸口に来ていて、あなたをも運び出します」。これを聞くと、彼女もその場で倒れて息絶えました。サツピラもまたそこで死ぬのです。

いかがですか？このことを聞いて、あなたのうちには非常な恐れが生じましたか？すでに見たように11節に「そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常な恐れが生じた」とあるように、あなたはこのことを聞いて、主への恐れが生じましたか？それとも、そんなこと今の時代には起こらないと無関心でいられるでしょうか？このことを自分の心と行動に当てはめて見た時、私のうちには恐怖心が生じました。

というのも、アナニヤとサツピラは、なぜこのようなことをたくらんだのでしょうか？彼らは心を合わせて偽ることをしたわけですが、彼らはこのことがバレないと思ったのでしょうか？当然そう思ったから、偽ったのだと思うのですが、ということは、彼らは神様を信じていなかったのですか？なぜなら、神様は、全知全能のお方です。主の受けれる十字架の苦難さえも、あらかじめ語っておられた方です。そんな神様を信じる者たちに対して、偽りを持ち込もうとしたということは、彼らは神様を信じていなかったのではないのでしょうか？

もし信じていたのに、そんなことをあえてしたというのであれば、それはペテロがサツピラに語ったように、彼らは主を試みたのです。そして、もし信じてなくて、このことをしたのなら、彼らは偉大な神様を侮ったのです。どちらにしても彼らは、神様ではなく、自分たちのことを優先することで、教会に偽りを持ち込むことを良しと考えました。でも神様は、それを防がれた。その場で、彼らを死に至らされることによってです。

では、このことを私たち自身に当てはめて考えてみましょう。皆さん、あなたのうちには彼らのような偽り、偽善はないですか？あなたの日々の歩みは、主イエスを救い主と告白する者にふさわしいものですか？つまり、あなたは主のみことばに聴き、祈りを通して聖霊の導きにいつも従っておられますか？聖書が示すように、あなたは自分で自分を救えない罪人であることを認めるゆえに、罪人を唯一救うことのできる方、あなたのために十字架にかかり、その死をもって罪と滅びからあなたを救い出された主イエスにのみ、望みを置いて生きておられますか？そこには、この主に対する不信仰や不従順といった偽り、偽善は全くないですか？

アナニヤとサツピラのように、実際よりも自分を良く見せようとして嘘をつくことはどうですか？そのようにして自分を何者かのように見せようとするのではないですか？また、自分で自分を救おうとするゆえに、すべてを主のものとするのではなく、自分のものは自分のものとするのではないですか？そのようにして神様の救いも、この世での自分の考える幸せも、両方得たいと欲ばり、結局、どっちつかずの生ぬるい生き方をしているということはないですか？そのような歩みは、神様に対して偽っていることにはならないのでしょうか？

私は自分のうちに、そのような思いや言動が全くないとは言えません。それゆえに、「自分はアナニヤとサツピラとは違う」とは言い切れないのです。それは別に誰かと心を合わせて、主をだまそうとしているわけではありません。でも理由がどうであれ、結果として、そこに自分の信仰告白と違う生き方があるならば、それは主に対して偽っている、そこには偽善があるというべきではないでしょうか？そして、主はその本当のところをすべてご存知なわけですから、なおのこと、私は「自分は大丈夫です」とは言えない。むしろ、主がアナニヤとサツピラに成されたことを知って、恐れを感じているのです。

でも、そのような恐れがあるからこそ、私のうちにはいつでも主への感謝があります。それは、その弱さや欠けにも関わらず、こんな私のうちにもご自分に対する信仰があることを、主が認めて下さっていると信じるからです。そうでなければ、私に対する主のさばきは、ただ先延ばしにされているに過ぎません。でも、皆さんの多くがすでに味わい知っておられるように、私たちの主は、実にあわれみ深く、恵みに満ちたお方です。信じる者に、ご自身の御霊を注ぐことで、誤りを示すだけでなく、そこに赦しと回復を与えて下さる方、さらには、義の歩みへと進ませて下さる方です。

ですから、私は自分で自分を大丈夫だとは言えません。でも終わりの日に、主に「大丈夫だ」と言ってもらえるよう、いつも主の方向を見ていたい、最後までこの主に信頼してついていきたいと願われているのです。あなたは「聖霊を欺くな」「主の御霊を試みるな」と言われて、それを自分の心で決心してできるものだと思いますか？「アナニヤとサツピラのようになるな！」と、彼らを反面教師にすることで、あなたのうちから主に対する不信仰や不従順といった偽りはなくなりますか？もっと言うと、それであなたは進んで主に従順な者となるのでしょうか？今日、あなたは進んで主の御心を行う人ですか？

主が求めておられること、それはご自分に対して、またご自分の教会に対して誰も偽り（偽善）を持ち込まないことですが、でも、それは消極的な面にすぎません。もっと積極的な意味では、主はご自分が十字架と復活を通して現されたその愛と恵みを私たちが信じることで、聖霊を受け、その力によって、いつでも、どのような時にも、キリストの証人となることです。ですから、「聖霊を欺くこと」、それがいかにその主の救いのご計画を妨げ、その人自身、また周りにいる人々にも災いをもたらすものであるかを知らなくてははいけません。

そのように言った上で、でも、主は、私たちに対して今日もあわれみ深くあつて下さいます。どうか、そのあわれみを逆手にとり、主を侮る人がいせんようにと願います。なぜなら、その偽りゆえに、アナニヤとサツピラを打たれた主は、お心一つで私たちを立たせることも、倒すこともおできになるからです。私たちの主は、この世に人としての弱さをもって来られたゆえに、私たちの弱さに同情して下さる方です。その弱さを知るからこそ、ご自身の御霊を注いで下さいました。それは聖霊を通して、私たちに力を与えて御心を行わせて下さるため、またご自身を現すことで、私たちをご自分に似た者へと造り変えて下さるためです。私たちは、この力強い主の前に、へりくだるお互いとさせていただくことはありませんか。